中大高通信　令和７年 11 月号　　文責：仲森友英（教頭）

二学期の折り返し地点も過ぎたこの時期、学校だよりをお届けします。この時期、生徒に対して「次」を意識してもらうよう働きかけていきます。「次」ということは別れの季節が近づいているということであり、そのあたりを感じてほしいと思っています。

◆◆◆　　◆◆◆　　◆◆◆

11 月の中大高

霜月とも呼ばれる 11 月は、結構節目の月です。

９月に文化祭と体育祭という二大行事が終わり、ほっとする間もないまま 10 月の中間考査です。比較的長いとされる２学期もあっという間に折り返し地点、ようやく一息つける時なのです。さすがに暑いといっても高が知れていて、体も楽になる季節でもあります。そうした時に、後期生徒総会が開催され、会長含む三役が交代します。これをもって３年生は生徒会からも一線を退き真の代替わりとなります。３年生に残された行事？は、高校最後の期末考査しかありません。もちろん３学期もありますが「レギュラー」としての高校生活はあと１カ月半です。

その３年生のこの時期…。

教師としては、期末考査＝学年末考査に向かって、授業を進めると同時に、成績のことも頭に浮かびます。附属校であるがゆえに、この学年末考査は重大です。何しろ、３年間の成績が確定し、その成績によって中大の進学が決まるからです。数からいえば少数派となる受験生はここからが本番です。友達は進路を決める中、共通テストなど気の抜けない日々を過ごさなければなりません。己の覚悟が試されるときです。

３年生を教えていた時に思っていたのは、今の日常はあと１カ月しかないことを伝えたい…、この何気ない日常も本当に残りわずかであり、大事に過ごしてほしいというものです。教師の授業内容は、よほどのことがない限りすぐに忘れてしまいますが、友達との何気ない会話など結構覚えているものです。それに、一つの空間で一定の拘束のもとで過ごすことは、この先ありません。その貴重さを伝えたいと思いながらの授業です。残り少ない「通常の」生活を楽しんでほしい限りです。

２年生。

「顔」の学年ですが、その顔が問われる時期です。二つの大きな行事が終わった今、他の高校生と同様に進路について真剣に考える時です。自覚しようと思えば思える時でもあり、こちらとしてはそこに気づかせたいと頑張る時期です。クラブ活動をしていれば、気づくハードルは低くなりま

す。というのは、３年生の存在も消えた上に、夏休みを経て雰囲気もちゃんと「高校生」になった１年生を導くたび、先輩の自覚が高まるからです。それ以外の生徒も、二者面談、進路ガイダンス、進路希望調査を通して、何となく追い立てられている感じを作っています。実はこれも、今を大事にしてほしいというメッセージにほかなりません。

１年生。

先ほども書いたように、５月末のＨＲ合宿、夏休みを経て高校生になりました。前回も書きましたが、不思議なことに、その二つが中学生の顔から高校生のそれへと変貌する機会と認識しています。制服に着られていた感もなく、制服を着こなしているようになりました。顔つきも中学生と比べて、「甘さ」も消え、大人に近づきました。高校の生活リズムにも慣れたことも背景にあるのでしょうか。

この時期の未来を見据える動機付けは修学旅行選定です。委員が具体的に行先の候補を絞り、プレゼンします。それにより３年生を意識することになりますし、後輩のいる来年のホームルーム合宿へつなげる意味もあるのです。いずれにせよ、まだまだあるように感じる高校生活も実は少ないことを伝えようとしています。

◆◆◆　　◆◆◆　　◆◆◆

秋が深まって、日が短くなったこの時期は、校内の賑わいとは別に、終わりが見え始める寂しさが漂っています（と、私は感じています）。